



第5回実施報告

日時：2019年1月12日（土）13:00-16:00

場所：広島大学大学院国際協力研究科（IDEC）内 大会議室

参加者：生徒17名，留学生26名，大学教員2名，見学者（大学生）1名，本校教員5名

実施内容

第5回 IDEC 連携プログラムでは、IDEC を訪問し、第3・4回で受けた留学生からの指摘を参考に、加筆・修正をし、発表し、議論しました。最初に、1グループにつき10分間の持ち時間で、5グループが発表を行いました。それぞれ、留学生から発表内容について質問が出て、用語の定義の確認や、統計資料の妥当性について疑義が出ましたが、準備した内容に基づき、発表内容についての理解を深めることができました。プレゼンについて出された留学生から



の質問を理解できない時には、IDEC の先生方の助けて、質問の意味や意図の確認などが行われる場面もありました。次に、留学生が各自の興味に応じて各グループに分かれ、議論を行いました。その過程では、例えば、自分たちが良いと考えていた解決策は、別の害を生むことがわかったりすることがあったようで、アカデミックな議論の拡がりに終着点を見いだせず、頭を悩ませているグループもありました。しかし総じて、積極的な議論がみられ、考えが深まったようでした。

IDEC の清水先生から、まず英語を母語としない者の中でのコミュニケーションが取れたことから、英語の力を再認識してほしいということ、またプレゼンの不十分な点を考えることで、自分のメッセージをどのように伝えと良いのかを追求してもらいたいとお話いただきました。最後には、参加者がそれぞれの母語で「ありがとう」と言う機会がありましたが、その多様さにはみな驚いていた様子でした。

IDEC 連携プログラムでの経験を通し、生徒たちは国際社会で生き抜くことの難しさを感じ、それと同時に生き抜く力を養うためにすべきことについて、ヒントを得られたのではないかと思います。IDEC の先生方、留学生の皆様、ありがとうございました。

生徒の感想

○留学生たちや他の生徒と英語で諸問題について議論するという貴重な経験の中で、やはり一番感じたのはひとりひとり考えが大きく違うのだなという事だった。これはもちろん今まで行ってきた日本人の生徒などとの議論でも感じていたことではあるが、今回留学生とも議論をすることで、その個人個人の持つバックグラウンドによって大きく考えや認識に変化を及ぼすのだという事を知った。例えば、第5回では災害に関しての議論に参加したのだが、その中で自分たちは災害というと豪雨、地震、台風などを思い浮かべたが、議論に参加していたモンゴル出身の留学生は、災害と聞いてまずモンゴルでの大雪の事を話してくれた、という経験をした。ほかの留学生たちも考え方などに大きな差異があり、考え方は今まで暮らしてきた環境など複雑な要因に左右され、日本での物の見方が世界でも常に

通じるわけではないのだと思った。今回参加したことで多くのことを知れて参加してよかったと思う。

○研究を始める時に必ず必要になるのは、言葉の定義であるということを知った。最初、留学生のプレゼンを聞いたときに全く意識をしていないことだったが、後で見返すと、どのプレゼンにも含まれていた。定義がないと、議論がかみ合わないことが分かった。また、留学生の方には話の導入の時に聞き手に視覚的なイメージを持ってもらえる写真やイラストを用意することが大事だと言われた。言語に関係なく相手に伝えることができる手段としてとても有効だと大学の先生も言われていた。留学生との交流を経験し、本当にそうだなと思った。さらに、資料を集める時に大切なこととして留学生の方が特に強調されていたのは、長期間のデータを集めることだ。私達のプレゼンの中の1つの資料として、二酸化炭素の排出量と大気中の濃度のデータを集めたが、自分たちで集めたデータは数年分のものだった。地球環境の変化の証拠として、適切ではないということだった。指摘されたことはどれも難しいことではなく、考えてみれば当たり前のような事も多かったが、自分たちが作っているときには気付かなかった事を教えてもらえて、とても良い経験になった。これから先のプレゼンや研究で活かしていきたい。

○外国人留学生と交流する機会は初めてで、かなり緊張もしていたが、彼らと交流することで自分の知らない考えを知ることができてとてもわくわくした。英語を使つての議論は思っていることをなかなか伝えられずもどかしく思うこともあったが、何とか伝えられた時には、言語の壁を超えるという言葉の実感がわいた気がした。このプログラムでは多くの知識・経験を得ることができたが、その中でも私が最も重要だと思ったのは、自分の考えを伝えようとする姿勢の大切さを学んだことである。全5回のプログラムにおいて、毎回留学生と英語で会話することがあった。その時、最初第1・2回では英語だとうまく伝えることができないうと思ひ、しばしば話すのをためらってしまった。しかし、それ以後は、思い切つてつたない英語でも伝えようすれば相手も理解しようとしてくれることがわかつて積極的になつたおかげで、議論を通して考えが深まることが多くなつた。この経験から、今後の社会ではグローバル化が進むので、同様の機会があると思うが、今回のプログラムでの経験を活かし、意見をはっきり正確に伝えることはできなくても、とりあえず伝えようと努力するようにしようと思う。

○自分にとって、新しい経験がつまつたプログラムだったということが一番に言えると思う。というのは、今まで私が参加してきたエンパワーメントプログラムやイギリス研修で重視され、生徒の多くが目標としていたのは「自分のことを英語で伝える」、言つてみれば考えることから最後に納得するまでが自分の中だけで終わる、自己完結型の目標だったと思う。しかし、今回は初めて「自分」だけでは終わらない領域に英語で足を踏み入れたように強く感じたのだ。学術的な内容しかり資料の作成方法しかり。中心にはいつも聞き手がい

て、聞き手基準でパフォーマンスを調整しつつ内容に関しては自分たちも満足できるレベルまで高める。そのようにして両方に気を配ることはプログラムが中盤を迎え、今のグループのメンバーが初めて集まつたときに話したことだったが、想像以上に難しかった。高校生の時点でこうした経験をさせてもらったのは本当に貴重なことだし、ありがたい。すべての関わつてくださった先生方や留学生さんたちに感謝したい。

